

隔絶の地ユタ

| 年表 | | |
|---------|------|------------------------------------|
| 年代 | | 重要な出来事 |
| 1847 | 1857 | 聖徒たちは西部に100以上の入植地を築く |
| 1850.9 | | ブリガム・ヤングを知事としてユタが準州になる |
| 1851.9 | | 「逃亡官僚」がユタ準州を去る |
| 1855夏 | | 干ばつとクリケットの害がユタの経済に大きな打撃を与える |
| 1856秋 | | 「改革」が始まる |
| 1856.10 | 11 | 聖徒の勇敢な行動によって手車隊のウィリー隊とマーティン隊が救出される |



ジョン・M・バーンハイゼル（1799－1881年）はペンシルベニア州で生まれ育った。ペンシルベニア大学で医学を学んだ。教会に加入してからは、1841年にニューヨークで監督の責任に召された。

聖徒たちがロッキー山中に避け所を確立した後、バーンハイゼルは聖徒たちの声を代表する準州選出連邦下院議員に選ばれた。彼はこの職を連続4期務めた（1851－1859年）。1861年にも再選され、公職から引退した1863年までその任を務めた。

聖徒たちはソルトレーク盆地に到着した当初、敵から隔絶された地に来て、平和と安らぎの中で神の王国の建設ができることを喜んだ。1847年7月24日に、ブリガム・ヤングは開拓者隊の会員たちこう宣言した。

「もし合衆国の人々がわたしたちを10年間そっとしておいてくれるなら、ほかに何の恩恵も求めようとは思いません。」¹

聖徒たちは主の助けと自らの勤勉な働きによって10年の間に堅固な避け所を築いたが、そこに至るまでの道のりは決して平坦な^{へいたん}ものではなかった。連邦政府から任命された官僚たちとのあつれきが高まり、教会員をシオンに集合させ入植させるには大きな犠牲が求められた。

ユタ準州の組織

教会の指導者たちは1848年に、デゼレトを州にするか準州にするかについて合衆国政府と交渉する計画を決めた。1849年3月には、準州として申請するに当たって準州政府官吏となるべき人物を承認するための選挙が行われ、3月初旬のうちに2,270人の署名を含む長さ22フィート（約6.7メートル）もの請願書がワシントンD.C.に送られた。それは広大な地域に及ぶ準州の創設を請願するもので、準州該当地域としては、現在のユタ州とネバタ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州、コロラド州、ワイオミング州、そしてオレゴン州の一部、カリフォルニア州の3分の1、ここには港湾都市サンディエゴを含む太平洋岸沿いの南北に細長く続く地も含まれていた。

政治面への眼識を備えていた医師ジョン・M・バーンハイゼルはデゼレトの声を国会に伝えるために選ばれた。彼はデゼレトからワシントンへ向かう途中、東部で幾人かの重要な立場にある政治家たちと会い、自分の腹案に対する強い支持を求めた。1849年11月に、バーンハイゼル医師はフィラデルフィアでウィルフォード・ウッドラフと教会に非常に好意的なトーマス・L・ケイン大佐と会った。1年前にブリガム・ヤングの要請を受けて、ケインはワシントンに滞在し、デゼレトを準州政府とすることについてジェームズ・K・ポーク大統領やそのほかの政府高官と話し合いを持っていた。彼は、ワシントンにはモルモンに対する同情心のまったくないことに気づいたため、デゼレトは州という地位を得るための申請を行った方がいいと勧めた。準州という立場では、州政府の役人が大統領によって任命されるからである。

ケインはウィルフォード・ウッドラフに次のように話した。「準州政府よりは、議会の意のままになる政体のない今の状態のまがいい。政府の役人は政治的な術策を巡らして皆さんに敵対するでしょう。彼らに治められるよりは自分で自分を治めた方がいいのです。…… 皆さんを利用して自分の利益を得ることしか考えない腐敗し切った役人がワシントンから来て、肩章の付いた軍服で威張り散らして歩き回

隔絶の地ユタ



トーマス・リーパー・ケイン（1822 - 1883年）は当時の偉大な博愛主義者の一人で、ほぼ40年にわたり獄中にある人々、クエーカー教徒、そして聖徒たちにも助けの手を差し伸べた。1861年から1863年にかけては、北軍の軍人として南北戦争で戦い、何度か負傷している。

トーマス・L・ケインの死から4か月後、ジョージ・Q・キャノン長老はセントジョージ神殿で彼のために神殿の儀式を執行した。

る姿など見たくはないでしょう。」またケインは、「法律書や法律家特有の策略がなく、人間や様々な物事に対する洞察力を持っている」という理由を挙げて、ブリガム・ヤングが知事になるように勧めた。²

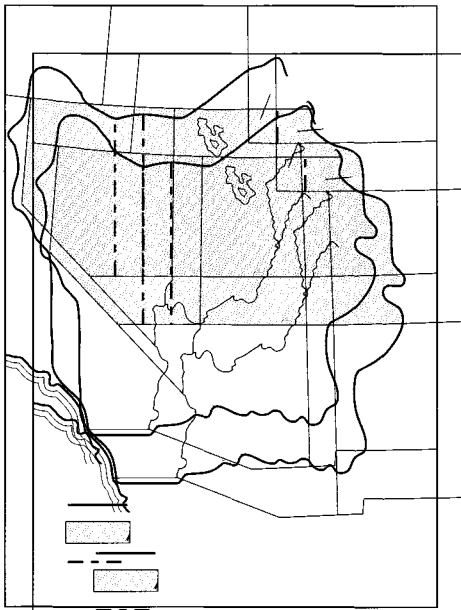
バーンハイゼルがケインに会ったころ、ソルトレーク・シティの教会指導者たちも、準州ではなく州への昇格を目指してロビー活動（議会への陳情運動）を進めるべきであるという決定を下していた。彼らはデゼレト州の憲法の草案を作成し、その中には知事としてブリガム・ヤング、副知事としてヒーバー・C・キンボール、州務長官としてウィラード・リチャーズなど大管長会を含めた必要とされる州政府官吏の選任案も入っていた。アーモン・W・バビットが議会への使節として選ばれ、彼は州憲法草案を携えて7月に出発した。バビットはその文書をアイオワ州ケインズビルで印刷し、12月にワシントンでバーンハイゼル医師に会った。

しかし、不幸にも州昇格のその申請は一顧だにされなかった。ケイン大佐とバーンハイゼル医師がすぐに気づいたように、ワシントンの役人たちの頭の中はメキシコとの戦争で獲得した領土への奴隷制度の拡張を巡る北部諸州と南部諸州の対立でいっぱいであった。1849年12月から1850年の9月にかけて、議会では奴隷制度問題を巡る激しい論戦が行われ、グレートベースンのモルモンの入植地にはまったく関心が示されなかった。

議会で教会に対して最も友好的な人物は、イリノイ州選出の上院議員スティーブン・A・ダグラスであった。彼はノーブー時代にジョセフ・スミスや聖徒たちを擁護していた。上院の領土関連委員会の委員長をしていたダグラスは、丁重な態度でバーンハイゼル医師と会い、法律で定められた手続きに従って請願をしてみると約束した。議会は成長著しいカリフォルニアの州昇格申請には快く同意したものの、奴隷制度を巡る論戦の中で、人口の少いデゼレトやニューメキシコの州昇格申請について真剣な論議がなされることはなかった。ダグラス上院議員は、「自由」州の上院議員がそれ以上増えることを容認できない南部側を軟化させるために、州昇格ではなく準州昇格の申請をすることにした。彼はまたデゼレトという名前をユーツインディアンにちなんでユタに変えた。同僚の上院議員たち、特にミズーリ州出身のトーマス・ベントン上院議員の反感を避けるためであった。ベントン議員はデゼレトという名称は荒地を意味するディザート（desert）と響きが似すぎていると考えていた。³

長い論議の末に、議会は「1850年の妥協」として知られる一括法案をまとめあげた。この法案の内容は、カリフォルニアを自由州として、またユタとニューメキシコについては、奴隷州か自由州かの最終的選択は住民の判断によるものとするという条件で準州として認めるものであった。1850年9月9日、ミラード・フィルモア大統領はユタ準州創設のその法案に署名した。末日聖徒側も連邦政府側も、この措置が最後に州昇格を認められるまでの46年にわたる不信と摩擦の幕開けになるとは知る由もなかった。

フィルモア大統領が新しい準州政府の役人の選任を考える段階になると、ロビイスト（院外活動をする人）としてのバーンハイゼルの手腕が特に重要になった。バーンハイゼルは大統領と会ってこう話した。「ユタの人々は、アメリカの市民として自ら選んだ信頼の置ける人間に治められ、意見、考えにおいて彼らと一致すること



申請されたデゼレト州の領域

が自分たちの権利であると考えざるはありません。」⁴

フィルモアは、準州政府の役人がすべてモルモンから成る指名候補者名簿はとも上院の承認が得られるものではないと憂慮し、妥協策として連邦政府が指名する職に4名のモルモン（ヤング、スノー、ブレアー、ヘイウッド）とそれ以外の4名を選任した。新しいユタ準州政府の高官として以下の人々が指名を受けた。知事兼インディアン指導管理官としてブリガム・ヤング、州務長官としてバーモント州出身のブラフトン・D・ハリス、裁判所長としてペンシルベニア州出身のジョセフ・バフイントン、陪席判事としてオハイオ州出身ゼルバベル・スノー、アラバマ州出身ペリー・E・ブロッカス、連邦政府検事としてユタ州出身セツ・M・ブレアー、連邦裁判所執行官としてジョセフ・L・ヘイウッド、インディアン保護管理官としてヘンリー・R・デイが指名された。

モルモン以外の人々とのあつれき

1850年の秋と冬から51年にかけて、連邦政府の措置に関する断片的な情報がソルトレーク盆地に達した。自分が知事に任命され、人口調査を行い法的な行政区を定める責務を与えられたことを知って、ブリガム・ヤングは1851年2月3日に就任の宣誓をするとすぐに、その仕事に着手した。ほかの責任に就く人々の選任は8月に行われた。その中で最も重要な職務は準州選出下院議員であり、その職にジョン・M・バーンハイゼルが就いた。

教会外の被任命者たちが到着したのは次の夏であった。最初に来たのは、任命を拒否したジョセフ・バフイントンに代わって就任した裁判所長レミュエル・D・ブランドベリーであった。聖徒たちはブランドベリ^{ばんさん}ーを歓迎し、晩餐会や舞踏会などでもてなした。またほかの役人たちも同様のもてなしを受けた。最後に到着したのは、陪席判事のペリー・E・ブロッカスであった。彼は一緒に旅をしてきたオーソン・ハイドに、できればユタ準州選出の下院議員になりたいという希望を漏らしていた。8月17日に到着したとき、彼はバーンハイゼルが下院議員に選ばれていたことを知って落胆した。

聖徒たちと「異邦」の役人たちとの摩擦は間もなく始まった。州務長官のブラフトン・ハリスが、人口調査と選挙に関して不正があったとブリガム・ヤングを非難した。法律上この二つについてはどうしても州務長官による認定が必要であった。ハリス夫人はモルモンの男性とその多妻婚の相手の女性たちは動物と同じだと、見下した発言をした。また教会に対して非友好的な彼は、州の印（訳注：州の公式文書に押すための印）と州政府の経営に充当されていた2万4,000ドルを知事ブリガム・ヤングに引き渡すことを拒んだ。

9月にペリー・ブロッカス判事がブリガム・ヤングに、教会の総大会で話をさせてほしいと言ってきた。彼は大会の席上、聖徒たちの親切と歓待への感謝の言葉を述べた後で、モルモンは愛国心がなく、女性たちに不道德（多妻結婚が理由）であるといった激しい非難を始めた。聴衆はブロッカスの話に激怒した。ヤング大管長は立ち上がって話し、その無分別な言葉を非難した。後に大管長と判事の間には手紙のやりとりがあったが、見解の一致に至ることはなく、融和し難い相違点が明らかになっただけであった。教会員でない人々の立場から見ると、合衆国とその役人に

隔絶の地ユタ

対して激しい非難を浴びせているモルモンは反逆罪に値し、特異な結婚制度を実施している不道徳で奇異な民であり、また教会の指導者の下に「非アメリカ」的な政治体制下にあると映っていた。一方末日聖徒は、ミズーリ州での迫害に対する救済要請を無視され、ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害者を裁判にかけようとしなかったことで、合衆国を批判するのは当然であると考えていた。さらに聖徒たちは、そのような不公正にもかかわらず、自分たちは合衆国憲法に忠誠を尽くしていることを主張した。

ブロッカス、ハリス、ブランデベリー、デイの4人は1851年の9月28日にユタを去った。聖徒たちに「逃亡役人」と呼ばれた彼らはワシントンD.C.に戻ると、多妻婚を含めてモルモンについて極端な尾ひれを付けた話をした。彼らはさらに、自分たちはブリガム・ヤングと多くのユタ住民の不法な行為と反逆的な勢いのために戻って来ざるを得なかったと主張した。そのような非難を予期していたヤング知事は、フィルモア大統領に手紙を書き送り、準州内の様子に対する自分の見解を示した。彼はまた教会の立場の申し立てを行うためにジェデダイア・M・グラントを派遣し、ジョン・M・バーンハイゼルとトーマス・L・ケインに合流させた。ヤング知事の手紙を受け予備的調査を行った後に、合衆国の國務長官ダニエル・ウェブスターは「逃亡役人」たちに、職務に復帰するか辞任するかのいずれかを選択するように命じた。それに対して4人は辞任の道を選んだのである。

一方ユタにおいては準州としての業務が滞りなく進み、以前デゼレト暫定州によって定められていた法律は正式に準州の法律の中に組み込まれるに至った。合衆国大統領に敬意を表して州議会はミラード郡を作り、郡庁所在地をフィルモアと名付け、そこを将来の準州の州都にすると指定した。1852年2月4日に採択された法案は非常に重要なもので、民事と刑事の両方の原審権を教会の役員によって管理されていた地元ユタの検認裁判所に与えるというものであった。これによって事実上、ほ

初め教会の指導者たちは、準州の州庁を地理的に見て州の中央部に置くことを考えていた。そのような背景があって、1851年10月にフィルモアが選ばれたのである。トルーマン・O・エンジェルの設計による準州庁舎の建設は1851年の12月に始まったが、1857年3月の南庁舎の完成をもって終了するにとどまった。

準州議会は1855年12月にここで最初に開かれたが、フィルモアで議会が開かれたのはこの一度だけであった。庁舎完成に十分な資金を連邦政府が拠出するまでは、準州議会はソルトレーク・シティで開いていくことが決定された。

庁舎建設のための支出が承認され、ヤング大管長の計画が実行に移されていけば、東庁舎、西庁舎、北庁舎も建てられるはずであった。そしてこれら東西南北の4庁舎は中央部にある丸天井を持つ円型の建物によってつながれることになっていた。この南庁舎はこれまで、宗教上の集会所、学校、郡、市の市民センター、劇場、監獄、ダンスホール、そして最後は博物館として用いられてきた。



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

時満ちる時代の教会歴史

とんどの訴訟が合衆国大統領の選任した判事が管理する連邦裁判所ではなく、地元の裁判所で行われるようになった。この状況は、1874年に連邦議会がユタ準州のこの法律を廃止するまで続いた。一方でフィルモア大統領は、聖徒たちを批判することがないために彼らに好まれた人々を役人として任命した。

1853年の秋、聖徒たちと教会外の人々の双方にとって悲しむべきことが起きた。ジョン・W・ガニソン大尉が、計画されていた大陸横断鉄道のためにユタ準州内で調査を行うために、陸軍の測量技師団を率いてやって来た。カリフォルニアへ向かうある移住団の者たちに自分たちの部族の一人を殺され二人を傷つけられたインディアンたちが復讐心^{ふくしゅう}を燃やし、ガニソンの一隊を攻撃して、ガニソン大尉とほか7人を殺害したのである。10月のことであった。この悲劇的な事件は末日聖徒の入植地に暗い影を投げかけた。ガニソンはその優しく友好的な人柄によって人々に尊敬されていたからである。教会員がガニソンたちの殺害に加担していたという事実はなかったが、その恐ろしい行いを計画し、命じたのはモルモンだったといううわさによって教会のイメージは損なわれた。1854年、ブリガム・ヤングの知事としての4年の任期が終わると、フランクリン・ピアス大統領はブリガム・ヤングの再任を望むユタ住民の請願を却下した。そしてE・J・ステップトー大佐を知事として選んだ。任命を受けたステップトーは、準州内を通る軍用道路建設の可能性を調査し、またガニソンたちの殺害者の逮捕を後押しするという使命を持ってユタへやって来た。しかしステップトーは知事としての任命を受け入れる代わりに、ブリガム・ヤング再任の請願書に署名して、それからカリフォルニアへと向かった。ピアス大統領は何人かの人々に知事職への就任要請をしたが、彼らにも断られて結局はブリガム・ヤングを再任命したのだった。

加速するシオンへの集合

新しいシオンの中にモデル都市を築くという非常に大変に思える仕事を進める一方で、教会の指導者たちはほかにも様々なチャレンジを引き受けていた。最も急を要したのは、イエス・キリストの福音を世の人々に伝えることと、改宗して聖徒になった人々の到着に備えることであった。教会の目標はすべての会員を西部に集めることであった。伝道活動は最初にイギリスで、さらにヨーロッパ大陸の各地でかなりの成功を収め、1850年代にはヨーロッパ全体の教会員数がユタ準州のそれをしのぐまでになった。1850年を例に取ると、英国諸島の末日聖徒は3万747人を数え、一方ユタの会員数は1万1,380人であった。伝道活動の成功が続く中で、あまりにも多くの人々の移住の手配は非常に困難な仕事になってきた。それは特に、改宗者のほとんどが貧しい人々だったことに起因していた。

このような困難があったにもかかわらず、1849年に永続的移住基金が創設されたことにより、アイオワ州の宿营地にいた残りの聖徒たちも、1852年までにはソルトレーク盆地へ入植することができた。その後の関心は、ヨーロッパの数多くの教会員を集わせることに向けられた。ヨーロッパの聖徒の集合については、すでにユタに入っていた友人や血縁者が重要な役割を果たした。教会の指導者たちは、現金や現金化できるものをソルトレーク・シティーの永続的移住基金事務局に寄付するよう、友人や家族たちに勧めた。それを受けた事務局はヨーロッパの代理業者に対

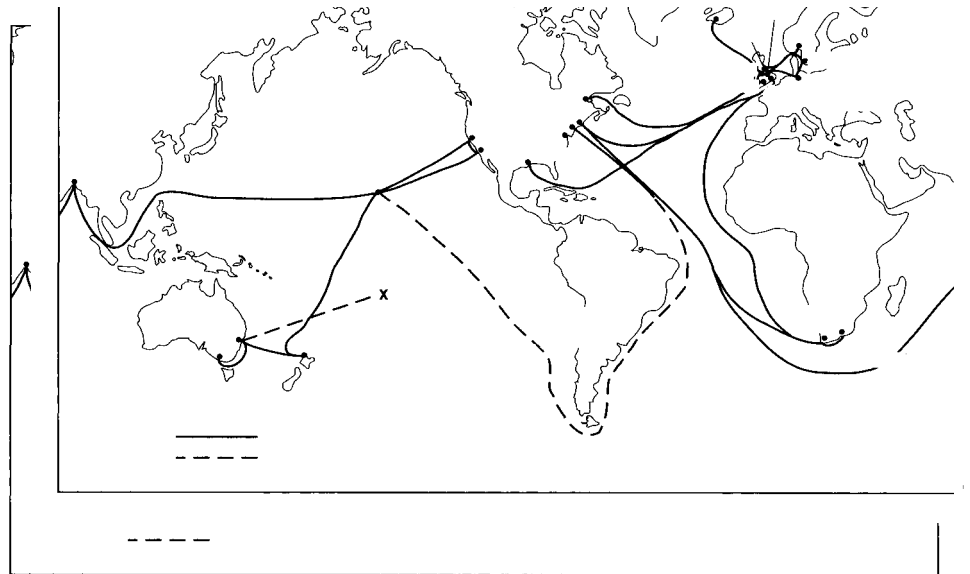
隔絶の地ユタ

して、その会社の世話の下に指名された人物をアメリカへ送るように指示を流した。しかし永続的移住基金だけに頼った移民はそれほど多くはなかった。ヨーロッパの聖徒たちの多くは、全額あるいは一部を自分自身で賄ったのである。

永続的移住基金事務局は移住して来る聖徒たちを助けるために、グレートベースンまでの各所に代理業者を置いた。イギリスのリバプールの代理業者は用船契約で船を雇い、移住予定者を集め、指示を与えた。最初の数年間は移住者たちはニューオーリンズまで船旅を続け、そこで別の代理人の迎えを受けて、さらにミシシッピ川をセントルイスまでさかのぼったのである。3番目の代理人は、ミズーリ川を500マイル（約800キロ）進んで次の中継地点までの手配をした。その中継地点には、ユタまでの陸路の旅の準備をした最後の代理人がいた。1855年に、ニューオーリンズ

ミシシッピ川ルートは、聖徒たちの健康を考えて取りやめとなり、それに代わって、移住者たちはフィラデルフィア、ニューヨーク、ボストンから合衆国に入国し、そこからは鉄道でセントルイスからさらに西の終点まで進むようになった。通常、旅は全行程で8か月から9か月を要した。

モルモン移民の進んだ海路



50年以上にわたって行われた海路による移住の中で、聖徒たちは「たった一度だけ海難事故を経験した。アメリカの帆船ジュリア・アン号の難破である。」⁵

28人の教会員を乗せたジュリア・アン号は、サンフランシスコを目指してオーストラリアを出航した。ジュリア・アン号が強風に襲われたとき、5人がさんご礁の海にのみ込まれ命を落とした。

「聖徒たちと何人かの船長たちは、この事故による被害が驚くほど小さかったのは神の手による守りと、多くの場合航海を始める前に船を奉献し、祝福したことによると考えていた。これらの船の多くは最後には海のもくずとして消えたが、モルモンの乗客を運んでいるときにそのようなことは起こらなかった。」⁶

1855年夏のクリケットの害はユタの経済に大きな衝撃を与え、聖徒たちの献金をもってしても永続的移住基金の維持が困難な事態になった。そこで教会の指導者たちは、移住にかかる経費を少なくするための方法を考えた。ブリガム・ヤングは1855年9月に、ヨーロッパ伝道部のフランクリン・D・リチャーズ部長に手紙を書

時満ちる時代の教会歴史

き送った。

「これまでのように、幌馬車や牛馬を買う経済的余裕がありません。そこで、わたしが以前に考えた計画に戻すことにしました。手押し車を作り、それに荷を積み、徒歩で進むようにするのです。10人に対して1頭か2頭の牛を付けるようにします。聖徒たちは速く進むことができます。以前ほど速くないにしても、はるかに安く済みます。また早めに出発して、毎年多くの兄弟たちを死に至らしめている病気が広がるのを避けることができます。」⁷

手車による移住について教会員全体に詳細な指示を与える大管長会の書簡が1855年10月の総大会において発表されたが、実行に移されたのは1856年になってからであった。手車を使うことによって移住の経費は一人当たり3分の1から2分の1まで削減できると見積もられていた。結果的に、より多くの人々が永続的移住基金を通してシオンへ来ることができた。

1856年の移民の数は、多くの聖徒が初めて手車で平原を横断することをもって著しい増加を見た。合衆国東部の港に到着した聖徒たちは、そこから鉄道で終点のアイオワ州アイオワ・シティーへ進んだ。アイオワ・シティーには代理業者が待っていて、100から500ポンド（約45キロから約230キロ）の食糧や衣類を手車に積み、それを引っ張るかそれとも押すかの方法によって徒歩で進む手車の準備をしていた。帰還宣教師に率いられた最初の3隊は平原を踏破し、9月26日から10月2日の間にソルトレーク盆地へ無事に到着した。最初の隊の旅装の準備を助けたマッカリスター長老は一つの明るい曲を作曲したが、その曲は手車を引いて平原を進む移民たちに愛唱された。

「ヨーロッパの海辺に住む聖徒たちよ、
さらに多くの聖徒たちとともに備えをせよ。
祖国を去る備えをせよ。
神の裁きが近いからである。
荒れ狂う海を越える備えをなせ。
はるかなる盆地へ行く前に。
そして忠実な者たちと旅を始めよ。
手車を引き、草原を渡れ。

コーラス——
押す者と引く者
力を合わせて、山を登る。
心明るく進め。
かの盆地へ着くまで。」⁸

先に到着していた人々と同じように、手車隊の人々も危険と試練を味わった。6歳のアーサー・パーカーの救出劇が行われたのは、最初の手車隊がアイオワ・シティーとネブラスカ州フローレンスの間の森林地帯を通過していた時のことだった。病気の状態が続いていたアーサーは、ある日途中座って休んでいるときに、気がつかないうちに置き去りにされてしまった。その隊は旅を続けたが、やがて突然の嵐

隔絶の地ユタ

に襲われ、急いでキャンプを設営した。子供たちの中にアーサーの姿がないことに気づいた彼らは、手分けして彼を捜し始めた。2日の探索の後、切迫した食糧不足という事情から彼らはやむを得ず旅を進めることになった。パーカー兄弟はただ一人、息子を探すために道を引き返した。彼が隊を離れるとき、妻が真っ赤な肩掛けを渡した。息子が死体で見つかった場合はそれで息子をくるみ、無事であれば、見守る家族への合図にそれを振ることにした。

何時間にもわたって、パーカー兄弟は頼るもののない小さな息子の名を叫び、捜し、祈りながら道を戻った。郵便物中継所を兼ねた交易所で、彼はある農夫とその妻がアーサーを見つけ、助けたということを知らされた。アン・パーカーとその子供たちは3日間、夫とアーサーの帰りを待ちわび、隊全体がアーサーのために祈っていた。3日目に、進んで来た道を振り返った彼女は、遠くに夫の姿を見た。夫は赤い肩掛けを振っていた。アンは砂の上にくずおれた。そしてその夜、彼女は6日ぶりに眠りに就いた。⁹

ツイス・バーミングラムも最初の手車隊の一員であった。彼は手車隊は1日に平均して約25マイル（約40キロ）進んだと記録している。1856年8月3日の彼の日記には次のように書かれている。

「朝食は取らず5時に出発し、深い砂の中を6マイル（約10キロ）ほど手車を引かなければならなかった。車が荷台の高さまで砂の中にのめり込んでしまう場所もあり、飢えと渇き、焼けつくような熱気による消耗でふらふらになり、何度か体を横にして休まなければならなかった。ほかの多くの人たちも同様だった。中には倒れてしまう人たちもいた。今日は悲しみのどん底だった。心が引き裂かれてしまいそうだった。病気のかわいそうなケイト、彼女は四つん^ば這いになって進み、子供たちも空腹と疲れで泣いていた。子供たちが元気をなくさないように、手車に乗せたり、道中あやしたりしなければならなかった。」¹⁰

1856年10月、ソルトレーク・シティーで行われる総大会の準備をしていた聖徒たちはだれもが、その年の移入は第3陣の手車隊の到着で終わると考えていた。しかし総大会の2日前にソルトレーク盆地にやって来たフランクリン・D・リチャーズは、雄牛が牽引する2両の物資運搬車を伴って盆地へ向かうさらに2組の手車隊があり、無事到着するには食糧や衣類が絶対的に不足していることを伝えた。そのウィリー隊とマーティン隊はリバプールを出発するのが遅れ、そのうえアイオワ・シティーで手車ができるのを待ってさらに遅れを重ねたのであった。そこで作られた手車は、よく乾燥していない木材で作ったためにネブラスカ州のフローレンスで修理が必要になり、ますます歩みが遅れた。

彼らの指導者の一人、リーバイ・サベージは春になるまでウィンタークォーターズで待つように聖徒たちを強く説得したが、彼の考えは、熱心ではあったが西部の自然の恐ろしさを知らない人々によって否決された。そのとき彼はこう宣言した。

「兄弟姉妹、わたしが言ったことはほんとうです。でも、皆さんが行く以上わたしも行きます。皆さんとともにいきます。力の及ぶかぎり、皆さんをお助けします。ともに働き、休みを取り、苦労し、もし必要とされるなら皆さんと一緒に死にます。慈悲深い神がわたしたちを祝福し、守ってくださるように。」¹¹

10月初め、二つの手車隊はワイオミング中部を苦しみあえぎながら進んでいた。わ

時満ちる時代の教会歴史

ずかに分配された衣類では凍るような朝の寒さをしのぐことなど不可能に近かった。

二つの隊がまだ平原にいることを聞いたブリガム・ヤングは総大会に集っていた聖徒たちに語った。その集会は正式に予定されていたよりも1日早く、10月5日に開かれた。ブリガム・ヤングはこう語ったのである。

「次にやらなければならないのは彼らをここに連れて来ることです。……わたしは今日、監督たちに援助を要請したい。60頭の元気なラバの隊と12台から15台の荷車を集めたい。明日まで待つことはできないし、その翌日まで待つこともできません。……」

皆さんに申し上げたい。わたしが今話しているような原則を実行に移さないかぎり、皆さんの信仰、宗教、信仰告白はだれ一人をも神の日の栄えの王国に救うことはできません。さあ行って、今平原にいる人々を連れて来なさい。」¹²

この呼びかけに対する反応は感動的なものであった。食糧などの物資を積んだ16両の幌馬車がすぐに集められ、10月7日の朝には4頭の元気なラバに引かれた16台の幌馬車と27人の頑健な若者たち（ブリガム・ヤングの「緊急招集兵」と呼ばれた）が最初の救援物資を積んで東へ出発した。そして、準州内の各地から続々と援助が寄せられた。10月末までには、250台の幌馬車が救援に向かった。

ウィリー隊はサウスパスの東数キロの所で例年になく早い雪に閉じ込められ、マーティン隊はそれよりもさらに遅れを取り、（東寄りの）ノースブラット川最後の渡し場の近くにいた。救援隊がようやくウィリー隊を見つけたのは10月19日のことであつた。マーティン隊はさらに9日後に発見された。救援隊の中には、マーティン隊は冬営地となりそうな所をきつと見つけたと考え道を引き返してしまった人々もいた。しかし、どちらの隊の聖徒たちも凍え、足取りは重く、餓死寸前の状態にあつたのである。それまでに何十人もの手車隊員が死んでおり、救援隊の到着後も100人近くが死亡したのである。

絶望的な状況にあつたマーティン隊を最初に発見した人々の中に、強健な肉体を持つイフレイム・ハンクスがいた。彼はそこへ来る途中野牛を仕留め、それを食用に解体していた。イフレイムはそのときのことを次のように述懐している。「わたしがその不運な一行を見つけたのは、まさしく彼らが夜のキャンプをしているときだった。わたしはそのキャンプへ足を踏み入れたときに見た光景を決して忘れない。その哀れな人たちは飢えに苦しみ、やつれ切った顔つきをしていた。寒さに震えながら、のろのろと体を動かして乏しい夕食の用意をする彼らの姿は、どんなに強い心の持ち主でも涙を誘われずにはいなかった。わたしの姿に気づくと、彼らは言葉では言い尽くせない喜びをもって声を上げた。そしてわたしが持って行った新鮮な肉を見たときの彼らの感謝の言葉は大変なものであつた。」¹³

助けた人々を盆地へ移送する仕事も困難なものであつた。夫を失った女性、親を亡くした子供たちが大勢いた。足が凍傷にかかって、歩けない人も幾人かいた。14歳のマギー・プーセルと10歳の妹エレンの足から靴と靴下を脱がせると、皮膚も一緒にはがれてしまった。マギーの足の壊死した肉の部分はそげ落ちていた。しかしエレンの足の凍傷はあまりにひどい状態で、ひざから下を切断しなければならないほどだった。ウィリー隊は11月9日にソルトレーク・シティ^{えし}ーに到着し、マーティン隊も重い足取りながら、聖徒たちの温かな迎えを受け11月30日に到着した。12月に



イフレイム・ノールトン・ハンクス（1826 - 1896年）は、ノーブー神殿の建設工事で働いていたところに、七十人に聖任された。彼はモルモン大隊の一員として従軍した。ユタへ着いた後は、距離にして1,200マイル（約1,900キロ）以上あるソルトレーク・ミズーリ川間で合衆国の郵便物を運ぶ仕事に携わった。イフレイムは7年の間に50回以上草原を横断した。そして死ぬ3年前に、ブリガム・ヤング・ジュニアによって祝福師の職に聖任された。

隔絶の地ユタ

手車隊

| 指導者 | 平原を横断した年 |
|--------------------|----------|
| 1. エドモンド・L・エルズワース | 1856 |
| 2. ダニエル・D・マッカーサー | 1856 |
| 3. エドワード・バンカー | 1856 |
| 4. ジェームズ・G・ウィリー | 1856 |
| 5. エドワード・マーティン | 1856 |
| 6. イズラエル・エバンズ | 1857 |
| 7. クリスチャン・クリスチャンセン | 1857 |
| 8. ジョージ・ロウリー | 1859 |
| 9. ダニエル・ロビンソン | 1860 |
| 10. オスカー・O・ストッダード | 1860 |

は、フォートブリッジャーで休息していた幌馬車の一行が盆地に着いた。

この不運な二つの手車隊の200人以上の犠牲者は、シオンに到着する前に凍てついた墓穴に葬られた。合衆国の開拓者移住史の中でこの二つの隊ほど多くの犠牲者を出した例はほかにない。悲劇の原因は旅の方法ではなく、例外的かつほとんど予測のつかない幾つもの悪条件が積み重なった結果によるものであった。教会はその後もさらに5つの手車隊を支援したが、それらはいずれも大禍なく盆地に到着している。

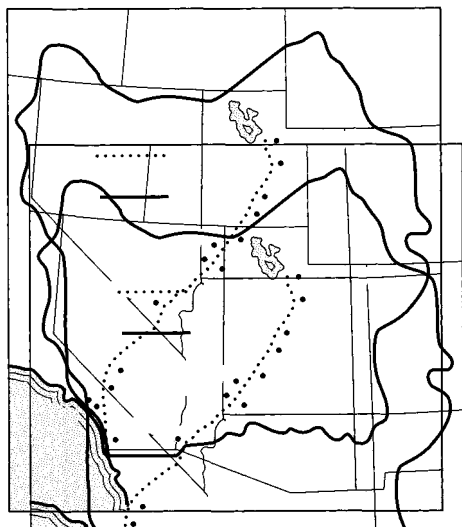
進展する入植地の建設

ソルトレーク・シティーに着いた聖徒たちは、通常エミグレーションキャニオンを抜けた所を出迎えを受け、そこからエミグレーションスクウェアと呼ばれた街区に案内された。ブリガム・ヤングや何人かの教会指導者が彼らを歓迎し、市内のワードがよく準備された祝宴を開いてもてなしをした。数日間地元の聖徒たちの世話になった後は、他の入植地へ派遣されるか、ソルトレーク・シティー地域に土地を与えられ、そこで働くようになるかのどちらかであった。特に初期のころは、移住して来た聖徒たちは多くの場合、彼らの持っている技術と様々な入植地での必要とを考慮してどこへ派遣されるかが決まった。1847年から1857年の間に100以上の町が開かれ、入植事業が行われた。

1849年から50年にかけてパーリー・P・プラットが指揮して行った南部地域の探検に続いて、教会の指導者たちは、南カリフォルニアへ向けて南西方向に伸びる山岳地帯の「モルモン回廊」沿いに入植地の建設を始めた。その皮切りが、農業の中心地パロワン、鉄生産の中心地シダー・シティーであった。どちらも1851年に開かれた町である。パーリー・P・プラットの探検隊が推薦した地域への入植は、1853年までにほとんどすべてが実行に移された。

南カリフォルニアのサンベルナルディノも1851年に開かれた入植地である。ここは太平洋岸の港に近い物資の補給地としての機能を持たせることを目的として作られた。この入植地は十二使徒定員会のアマサ・ライマン長老とチャールズ・C・リッチ長老が管理し、1857年に約7,000人の人口を擁するまでに発展していた。ヨーロッパの聖徒たちを南アメリカのケープホーン経由でカリフォルニアに向かわせ、そこからサンベルナルディノを通してモルモン回廊を北上し、ソルトレーク・シティーに至らせるという計画もあったが、用船契約が結べなかったために実現することはなかった。しかし、オーストラリア、ニュージーランド、南太平洋諸島からの聖徒たちの一部は、サンベルナルディノ経由でユタへ来たのである。後になって、ブリガム・ヤングはカリフォルニアにこのような大きな入植地を持つことの意義を考え直した。そして1857年にこの入植地の教会員たちはそこを引き揚げて戻って来るようにとの指示を受けた。一つは連邦軍がユタに迫っていたためであり、もう一つの理由としては、モルモン以外の隣人との間で摩擦や問題が生じていたからであった。サンベルナルディノの住民たちの中には、預言者の指示にこたえず、カリフォルニアにとどまった人々もいた。

入植地の発展は、インディアンに対する伝道活動によっても影響を受けた。シダー・シティーが開かれて間もなく、パージン川とサンタクララ川一帯を探検する調査隊が派遣され、1854年には、その地域のインディアンに福音を伝えるために宣教



ユタ南部を通り、ネバダを経て、カリフォルニア南部へ到達するルートは、「モルモン回廊」として知られていた。このルートに沿って置かれた一連の入植地やとりでは、太平洋岸へ向かう旅人たちの避難所となった。

時満ちる時代の教会歴史

師が送られた。この宣教師たちは福音を教えるだけでなく、インディアンたちが家を建てたり、農業技術をさらに学ぶ助けをした。また宣教師たちは、ネバダ州のラスベガス、ユタ州の現モアブ付近のコロラド川沿いにあるエルクマウンテン、アイダホ州中部のサーモン川沿いのフォートレムハイにインディアン伝道部を開くように割り当てられていた。ユーツインディアンの間である程度の成功を収めていたエルクマウンテン伝道部は、ユーツインディアンとナバホインディアンの間に戦いが起きて一部のインディアンが宣教師たちを攻撃してきたために、1855年に閉鎖された。ラスベガスとフォートレムハイの入植者たちは1858年にブリガム・ヤングによって呼び戻された。フォートレムハイが閉鎖されたおもな理由はショショーニインディアンがそのとりでを攻撃し、数人の宣教師が殺されたためであった。

教会はオレゴントレイルとモルモントレイルの分岐点の近くに二つの小さな入植地を開いた。この二つの入植地を建設したのは東からユタへ入る人々に必要な情報を与えることと、移民たちの補給基地とするためであった。ブリガム・ヤングは開拓者のジム・ブリッジャーからフォートブリッジャーを購入したいと考えていたが、オーソン・ハイドが入植地の一団を率いてそこを訪ねたとき、ブリッジャーとその仲間たちはとりでを売るつもりはないと断った。兄弟たちは当てが外れたとはいえがっかりすることなく、新しい入植地フォートサプライをそこから南へ12マイル（約20キロ）ほどの所に築いた。そこで彼らはインディアンたちへの伝道活動を行った。1855年になって、教会はとりでの所有者であるジェームズ・ブリッジャーとルイス・バースケイスからフォートブリッジャーを購入することができた。この二つの入植地はモルモンの旅行者にもそうでない旅行者たちに対しても物資の補給を行った。

この最初の10年間に行われた辺隔地における入植地建設の最後は現ネバダ州のカーソン盆地（1850年代にはまだユタ準州の一部だった）で行われたものであった。1855年にブリガム・ヤングは、検認裁判所判事および郡政の管理者としてオーソン・ハイド長老をこの地へ派遣した。1856年には約250人の人々がその美しい盆地地帯に入植し、インディアンへの伝道と教化の任を与えられた。しかし間もなく、教会による政治面での管理と文化的影響を嫌うモルモン以外の人々との間に様々な問題が持ち上がった。その地域での金鉱発見は、さらなる問題となった。そして1857年にこの入植地は解散された。

辺隔地での入植地建設には様々な問題があったにもかかわらず、教会のその努力は幾つかの要因によって総体的には成功したとの確信を与えた。個人的にあるいは有志の集まりで入植事業が始められるということはほとんどなかった。ほとんどの場所は教会が事前に選び、入植の後押しをした。場所の選定については、飲料に適した水、肥沃な土地、そのほか重要な物資の調達、インディアンの攻撃からの安全などを確実にするために、慎重に行われた。また数多くの有能な男性が入植地の指導を行うようにした。何百人という監督、管理長老、ステーク会長たちがそれぞれの町や村の建設を監督し、霊的な面でのアドバイザーとしてはもちろん行政担当者としての役割を果たした。そして多くの人々がそれらの責任を10年、20年、30年、あるいはそれ以上の長きにわたって果たしたのである。入植地の活力の源は、毎年やって来る何千人という移民たちであった。ユタにおける最初の10年間に、シオン



コーブフォートは1867年に開かれた。アイラ・ナサニエル・ヒンクレーは1867年にブリガム・ヤングから、コールビルの家を後にして北のフィルモア入植地と南のビーバー入植地の間を流れるコーブ川沿いの地にこのとりでを築く任務を与えられた。南と北の入植地からそれぞれ1日の道のりにあるこのとりでは旅行者たちの防護所となった。

四方の壁はそれぞれ100フィート（約30メートル）の長さがあり、厚さは基部が4フィート（約1.2メートル）で頂部は2フィート（約60センチ）、高さは18フィート（約5.5メートル）あった。

1988年8月13日に、この歴史的なとりでが当教会に譲渡された。現在は教会の訪問者センターとして用いられている。

隔絶の地ユタ



トーマス・ブロック（1816 - 1885年）は長年にわたり、教会の様々な状況の中で書記として働いた。初めはジョセフ・スミスの書記として働き、後にブリガム・ヤングに仕えた。彼はまた1847年7月24日にソルトレーク盆地に入った開拓者の隊の書記としても働いたことがある。七十人に聖任された彼は1842年と1856年に、イギリスで2度伝道の務めを果たしている。

に移住して来た聖徒は約4万人に上る。

それぞれの入植地にどのような人を送るかは、様々な方法で決められた。ブリガム・ヤングによって選ばれた家族は、新しい入植地が発表される総大会の中で名前を提示された。時には路上にたむろしている怠惰な兄弟たちに伝道や入植の責任が与えられることもあった。例えば1855年から56年にかけての冬、州議会堂で裁判が行われていたとき、その様子を見ようと多くの人々が詰めかけていた。議事堂内やその周りを歩き回っているだけの人々もいた。そのようなことが数週間続いていたとき、ブリガム・ヤングは書記のトーマス・ブロックを「そこに行かせて彼らの名前を控えさせた。裁判の見物よりも大切なことで、自分たちがなすべきことを何も持っていないのであれば、彼らに伝道の責任を与えるという目的があった。」¹⁴ヒーバー・C・キンボール副管長はその人たちの中から、30人をラスベガスへ、48人をフォートブリッジャーへ、35人をフォートレムハイへ派遣した。ほかの人たちもラスベガスに近い鉛鉱山での仕事を割り当てられたり、東インド諸島に召されたりした。また他の場合、教会の中央幹部は各グループの指導者となる人を指名し、彼らにどの家族を選び、募集するかを決める権限を与えるということもあった。すべての人がそのような責任を与えられたことを喜んだわけではなかったが、多くの場合、これらの召しは信仰上の決意の試金石として受け入れられたのである。

それぞれの新しい入植地の指導者は慎重に選ばれ、また新しい町の建設に当たって多岐にわたる能力、技術を確保するために人材の選定が行われた。ほとんどの入植地の中核になるのは農業に従事する人々であったが、ほかに大工、水車大工、機械工、家具職人、左官、塗装工、れんが造り職人、石工、ダム建設者、織物職人、仕立職人、皮なめし職人、測量技師、動物の肉の解体ができる人、パン職人、学校の教師、音楽家、幌馬車造りの職人、車輪修理工など様々な技術を持つ人々が必要であった。聖徒たちの入植地のほとんどは、社会生活と教会員としての活動が密接につながるように注意深く配慮されていた。中心部は、教会また学校として用いられる集会所の用地とされた。通常入植地は広い道路で分けられたます目状の街区によって構成されていた。各家族は町の中に地所を割り当てられて、そこに庭、小さな果樹園、鶏や家畜の小屋などを作った。しかし、主作物と家畜用の牧草は町の外で作られた。

新たな前哨地点^{ぜんしやう}に赴いた女性たちがその入植地で果たした役割については、あまり特筆されることがなかった。しかしほとんどの場合、末日聖徒の社会では男女の貢献度に差はなかった。女性の入植者たちは、家事だけでなく、男性のする多くの仕事も同じようにしていた。姉妹たちは家を建て、煙突を作り、木材の割れ目を埋め、丸太小屋外側の土塗り、内側のしっくい塗りや塗装などの仕事を夫と一緒にした。女性たちも灌漑用水路の開削^{かんがい}、植え付け、収穫、まき割り、干し草の積み上げ、牛の番や乳搾りなどの仕事をしたのである。

多くの場合、モルモンの女性たちが抱えていた仕事は、他の西部開拓者女性たちと比べて多かった。なぜなら、彼女たちの夫、父親、兄弟たちは伝道や教会の責任などで家を空けることが多く、家族の世話が女性と年長の子供たちの肩にかかっていたからである。彼女たちはこれらの働きを、日常行っている料理、缶詰作り、ドライフルーツ作り、粉ひき、洗濯、アイロンかけ、キルティング、裁縫、繕い仕事、

時満ちる時代の教会歴史

糸つむぎ、織物、石けん作り、砂糖作り、結婚式の準備、葬儀への出席、家屋の修繕や美化、子供の養育、教会の責任などのほかにしていたのである。家計を助けるために、ほかに家の中でできる仕事をする女性たちもいた。彼女たちは縫い物や洗濯の仕事を引き受けて、バター、チーズ、ドライフルーツ、カーペット、靴、帽子、紡ぎ糸、布地、ろうそくの芯^{しん}、ろうそくなどを作って売ったりしたのである。教師や助産婦として働く女性たちもいた。完全に時給自足できる家庭はほとんどなく、入植地の姉妹たちは協力し合いながら生活した。

初期のユタにおける教会の成長

およそ100の小さな入植地が開かれたユタにおける聖徒たちの最初の10年を通して、ソルトレーク・シティはその中心として発展していった。グレートベースンの広大な宗教社会の中心地とする、という目的をもってソルトレーク・シティは計画されたのだった。聖徒たちの築いた社会は、公平な土地の分配、農場や家畜の共有、公共事業の実施、組織立てられた移住計画、天然資源の計画的利用などの点において、西部でもユニークなものであった。また、利益を上げることがを優先して一等地を売却するようなことをせず地域社会全体の利便を重視したために、非常に広い道路を建設することができた。

ソルトレーク・シティでは半年に1度総大会が開催され、聖徒たちはそれに参加するために何百キロも離れた地からやって来た。総大会は旧交を温め、新しい出会いができる場であり、末日聖徒の一致を証する大切なシンボルの一つとなった。その大会は1852年4月6日にウィラード・リチャーズ副管長によって奉獻された旧タバナクルを会場として行われた。旧タバナクルは大会のほかに、プリガム・ヤングや教会の指導者などが出席する、日曜日の定例集会にも用いられた。大会と日曜日の集会で話された説教の多くは、1850年に創刊された教会の公式な新聞『デゼレトニュース』(Deseret News)に掲載された。1854年の分からはじめて、それらの記事の多くはイギリスにおいて『説教集』(Journal of Discourses)として年に1度まとめて発行された。

聖徒たちの経済的自立を目指す一環として、プリガム・ヤングは各入植地に什分の一事務所あるいは監督の倉を建設するように指示した。これらによって聖徒たちが必要としていたほとんどの物資が供給された。多くの人々は教会が行う様々な事業の中で、10日に1日の割合で労力の提供をした。しかし最も一般的に行われたのは、「物納」による什分の一納入であった。農業を営んでいる人々は鶏、卵、家畜、野菜、家庭で作った様々なものを什分の一事務所に持って来た。各地の事務所に納められた什分の一のおよそ3分の2は、教会全体の必要を満たすために、ソルトレーク・シティの中央什分の一事務所へ移された。

グレートベースンに入植を始めた当初から、聖徒たちは教育と文化的な生活に関心を示していた。ソルトレーク・シティで迎えた最初の冬、子供たちのために1教室だけの学校がテントの中で開かれた。後に教会の指導者はすべてのワードに対して学校建設の指示を出した。1850年にはデゼレト暫定州議会によって、デゼレト大学が創設された。同じ年にデゼレト演劇協会が組織され、毎年数回の上演を行った。1852年にはロレンゾ・スノーが、年代を問わずすべての人々が思索と行動のあらゆる



『デゼレトニュース』は1850年6月15日に、ユタ州ソルトレーク・シティで創刊された。1898年12月10日まで週に1度の発行であった。週2回発行の『デゼレト・セミウィークリー・ニュース』(Deseret Semi Weekly News)は1865年10月8日に創刊され、1922年6月12日まで続いた。日刊紙の『デゼレト・イブニング・ニュース』(Deseret Evening News)は1867年11月2日から発行を開始し、1920年6月15日号からは紙名を『デゼレトニュース』と変更した。

隔絶の地ユタ



ビーハイブハウスの東に位置していたブリガム・ヤングの私学校には、ヤング大管長の子供たちと近くの何人かの子供たちが出席していた。

る分野で学び成長できるようにとの目的で「多分野学術協会」を組織した。「多分野学術」というこの言葉は、彼がこの組織の適切な名称を考えあぐねていたときに自分で作り出したものである。

「この協会は週に1度ロレンゾの家で集会を持ち、そこで会員たちは楽器の演奏や歌唱、朗読、詩、エッセイなどを取り入れながら、科学や哲学に関する講義を含め広い分野にわたる知的なもてなしを受けた。プログラムによっては英語以外の言語で進められることも珍しくはなかった。」¹⁵

一般的に、社交活動はワードを中心として行われた。ワードで行われる親睦会^{しんぼく}、ダンスパーティー、演劇、音楽クラブの活動などは、聖徒たちの社会の雰囲気の良い貢献をした。1850年代にはほかにも、デゼルト農工協会、デゼルト神学協会、園芸協会などが組織された。

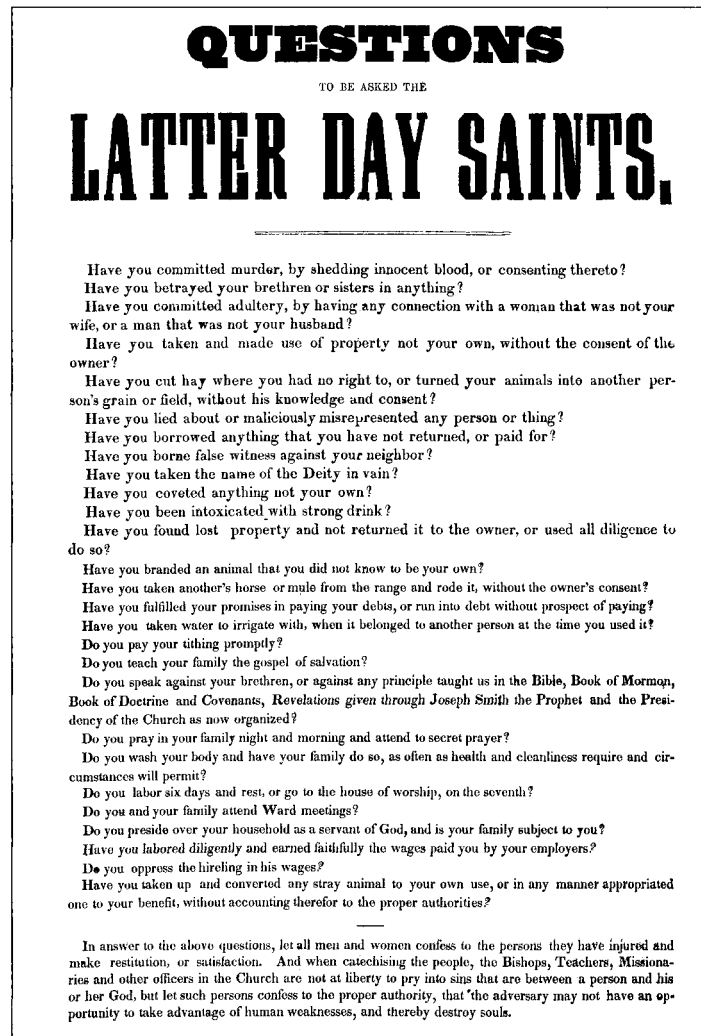
教会の組織もまた、ユタにおける聖徒たちの社会の拡大に応じた変化を見せた。各入植地には少なくとも一つのワードが組織され、一人の監督によって管理された。監督は管轄地域の物質的な面と霊的な面における活動を管理した。毎週日曜日には説教集会が開かれた。また月に1度木曜日に断食集会が行われ、教会員たちは断食してためた金を献金した。ブロックティーチング（現在のホームティーチングに似た活動）も開始された。ブロックティーチャーは成人のアロン神権者がメルキゼデク神権を持つ代理教師で、ワード内の家族を訪問し、善い行いをするように説き勧めた。普通少年たちがアロン神権に聖任されることはなかった。しかし、1854年1月のウィルフォード・ウッドラフの記録には次のように書かれている。

「今やわたしたちはここシオンにおいて、若い息子たちを小神権に聖任することを始めようとしている。」¹⁶

1850年代の宗教上の最も劇的な出来事は、1856年から57年にかけて行われた改革であった。新しい入植地が開かれる一方で、辺境での厳しい生活に明け暮れる中、霊的な無気力状態に押し流されていく教会員が多くいた。西部での最初の10年間、多くの聖徒たちは日々の生活に追われ、霊的な事柄をおろそかにすることが少なかった。ユタへの移民の急速な増加と1855年の深刻な干ばつとクリケットの害が重なって起きた経済不安の結果、1856年には改革の必要が特に明白になってきた。多くの聖徒たちが、擦り切れた衣服をまとい、飢餓の瀬戸際に立たされていた。教会の指導者たちは、そのような状態は聖徒たちが戒めを守ることをおろそかにしたことが一つの原因になっていると説いた。

1856年に大管長会は改革への動きを開始した。指導者たちは準州全域を訪ね、かつてない熱心さで悔い改めを説いた。特に第二副管長のジェデダイア・M・グラントは熱烈な説教で聴衆の心を揺り動かした。また、この改革のために召された特別な宣教師たちが聴衆に説き教え、悔い改めを叫んだ。ブロックティーチャーは、各自に行いを省みるように促す質問を書いたリストを教会員の家庭に届けた。すべての聖徒たちが、再度のバプテスマを通して主とその戒めに立ち返るように求められた。教会の指導者はこの改革の運動の先頭に立った。ウィルフォード・ウッドラフはこの改革の特性を次のように記述している。「神の御霊がこの民の指導者の間で火のように燃えている。彼らは人々の中に全能者の矢を放っている。J・M・グラントは鋭いもろ刃の剣で刈り込みを行い、目を覚まし、罪を悔い改めるよう人々に声高

ブロックティーチャーが末日聖徒の家族を訪問したときに尋ねた質問。



く叫んでいる。戻って来た長老たちは聖霊と神の力に満たされている。」¹⁷

この改革は聖徒たちの生活を良い方向に変えた。神の教えに添った道徳的な行いが再び彼らの生活の主流となったのである。彼らは遭難した手車隊の救出を通して、互いに愛し合い、危急に際しては手を携えて立ち向かえることを示した。グレートベースンに最初に到着してから10年目に当たる1857年の夏までに、教会は強固な基盤を築き、聖徒たちのなすべきこととして地上に回復された様々な事柄を達成していたのである。

注

1. *Journal of Discourses*『説教集』5: 226で引用
2. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1849年12月31日に続く記録で引用, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
3. *Journal History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会歴史』1850年3月5, 21, 27日参照, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレーク・シティ
4. 『日誌で見た教会歴史』1850年9月16日
5. コンウェイ・B・ソーン, *Saints on the Seas: A Maritime History of Mormon Migration, 1830 - 1890* 『海上の聖徒たち - モルモン海路移住史』1830 - 1890年 (Salt Lake City, University of Utah Press, 1983), 78
6. ソーン 『海上の聖徒たち』58
7. "Foreign Correspondence" *Millennial Star*

隔絶の地ユタ

「国外との通信文」『ミレニアルスター』1855年12月22日付, 813

8. リロイ・R・ヘーフェン, アン・W・ヘーフェン共著, *Handcarts to Zion* 『シオンへ進む手車』(Glendale, Calif.: Arthur H. Clark Co., 1960), 272

9. *Treasures of Pioneer History* 『開拓者歴史秘話』全6巻 (Salt Lake City: Daughters of Utah Pioneers, 1952 - 57), 5 : 240 - 241参照

10. “To Utah By Hand” *American Legion Magazine* 「人力によってユタへ」『アメリカンリーグ・マガジン』エライザ・M・ウェイクフィールド, *The Handcart Trail* 『手車隊』(Sun Valley Shopper, 1949), 13で引用

11. ヘーフェン, ヘーフェン共著 『シオンへ進む手車』96 - 97

12. “Remarks” *Deseret News* 「所見」『デゼレトニューズ』1856年10月15日付, 252

13. ヘーフェン, ヘーフェン共著 『シオンへ進む手車』135

14. ヒーパー・C・キンボールから息子ウィリアムにあてた手紙。「国外との通信文」『ミレニアルスター』1856年6月21日付, 397で引用

15. フランシス・M・ギボンス, *Lorenzo Snow: Spiritual Giant, Prophet of God* 『大いなる霊の持ち主, 神の預言者ロレンゾ・スノー』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1982), 73

16. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1854年1月31日

17. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1856年10月9日